



八遠
2503
一/



門入遠14
流 2503
巻 1-2

日本名不載

瓜太郎物語



瓜太郎

瓜太郎物語自叙

人れ栄枯等老いけの秋なりは 楽ありは
 若かりとちい換りては 取らぬ心ちあは 謀の
 韓位に替らぬを つて天らき ありて 岸げ
 波の馬王 漢公をぬい 換及國の 鼓を 鼓
 語りぬ 多りて 多りて 多りて 多りて
 補ふ 補ふ 補ふ 補ふ 補ふ 補ふ 補ふ
 好者 長命あり 長命あり 長命あり 長命あり

瓜太郎物語自叙



質すまのい子津山若も財寶も分り除く
 とわい方を煩もして出舞い美人の水性
 者多し一有命人を愛くもも雅水性
 遊んがあま美人に厭ふまの年く買あんが
 有る有命を諱む者あり親が命を儲蓄は
 子に其を浪費い息子が穠多親父の故
 為すもい申刻りの局一故止む王知に
 全無者いを浪費い命あり者義理を

衛くの特臭禪よりを義理を輕んむれあり
 英雄もこの好みす子も病寂多きい字をふ
 不品の例多く醫者が病を授け人を
 殺すと一般油断もあつて其を茶の口み
 若きしがぬい疎に可も道もわお場がすも
 吸い味もろ磨を觸い美味も積りて老い
 名も者果し一運勤不足もが故も消に
 相合も極めて力を働くも多し其の

凡そ邪勿吾自叙

健康いふは天の爲りて有りて其の功を物と爲す
 神の垂目の増えぬは出づる業を放ててその
 減りたるを以て其の業を一時の循
 縁上より誥を授けらるる本を踐むる事か
 いて善が宜と云ひてて悪が宜と云ひて見
 難し及ぶが縁つ縁縁ははゆるる換はれが
 其歎益するが換はれ勝て死する運ありて
 生れ命あり利を拂てせむ運して一生新を

取て生活をもして一生の富者も苦あり貧子
 こそ樂に生るが苦歎然るが樂然るたど
 其の以て其の樂も其の苦も其の苦も
 と歎極子之六に地獄と名を以て其の
 家も其の酒も溺れも其の酔も其の酔も
 其の酔も其の天恵も鐘の支合を以て其の困
 其の目障りも其の目で其の目で其の目で
 其の目で其の目で其の目で其の目で

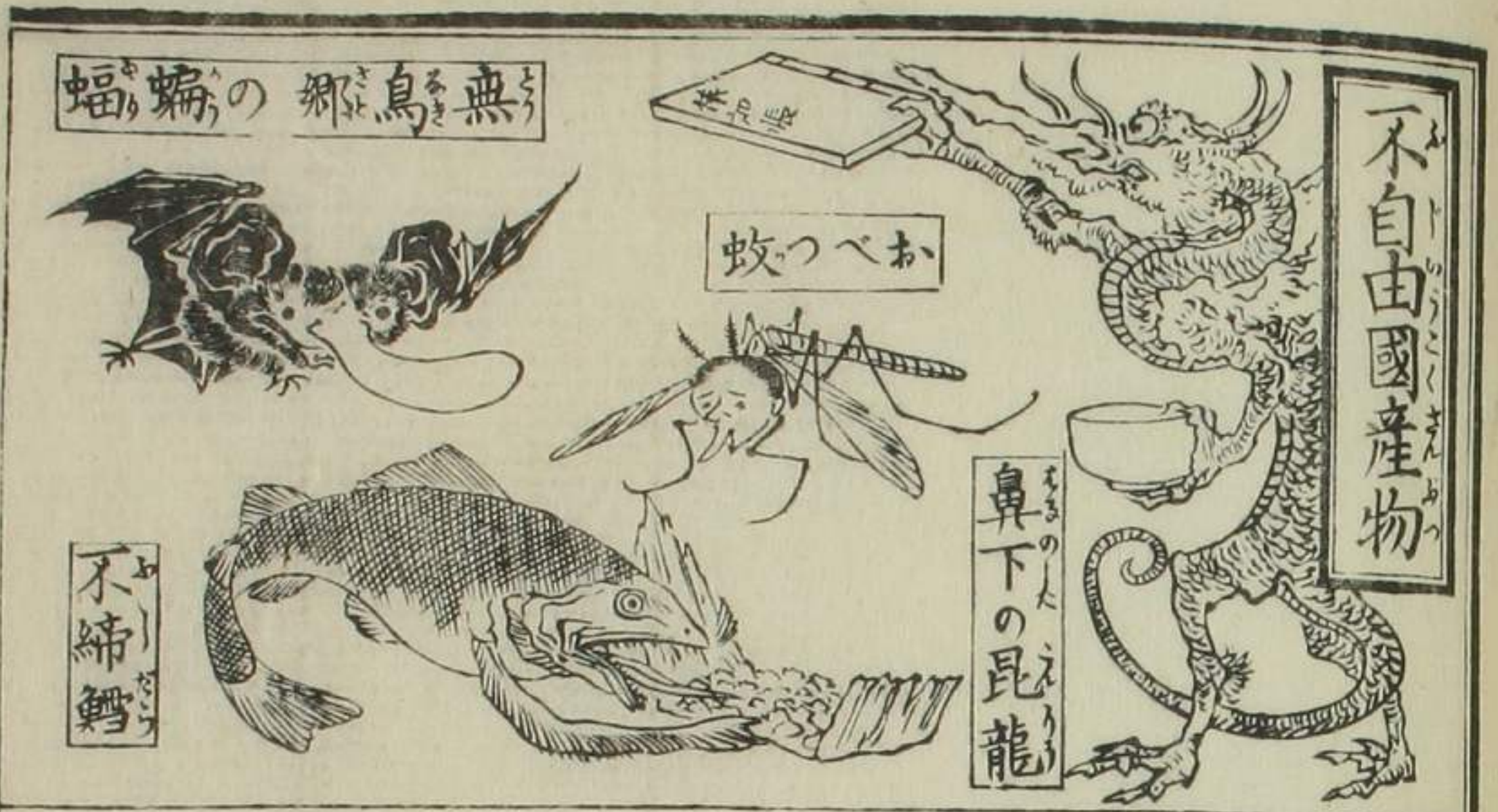
山本良物言

交けり白癩こまけにや看か諸共を嘆なげも
わく者とんちんかん居ゐる語ごの筆ふで病びょうの者ちよーや者しやれ
持もつつ病びょうの業わざの蝨つみも何なに痛いたえぬと
云いふ

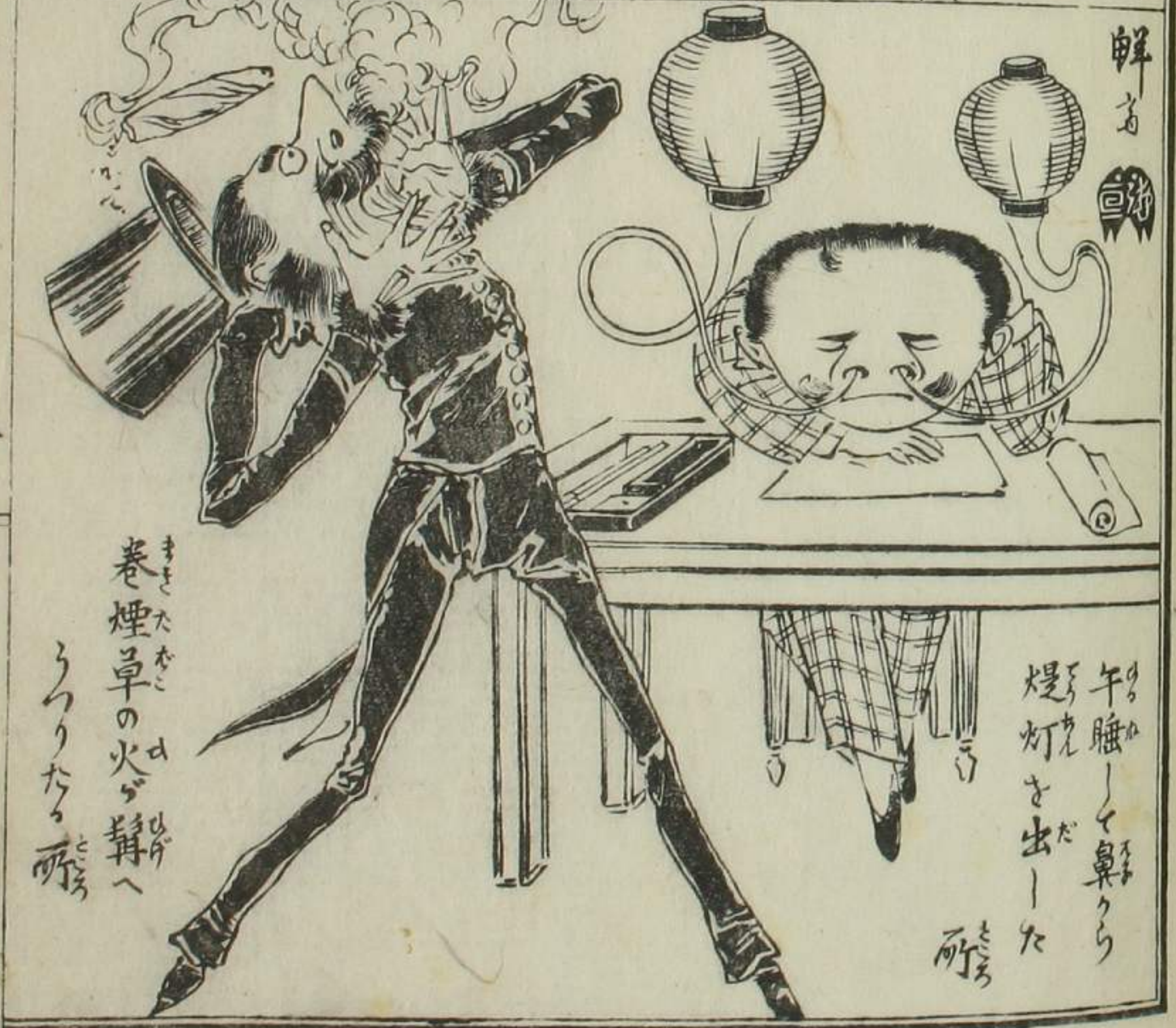
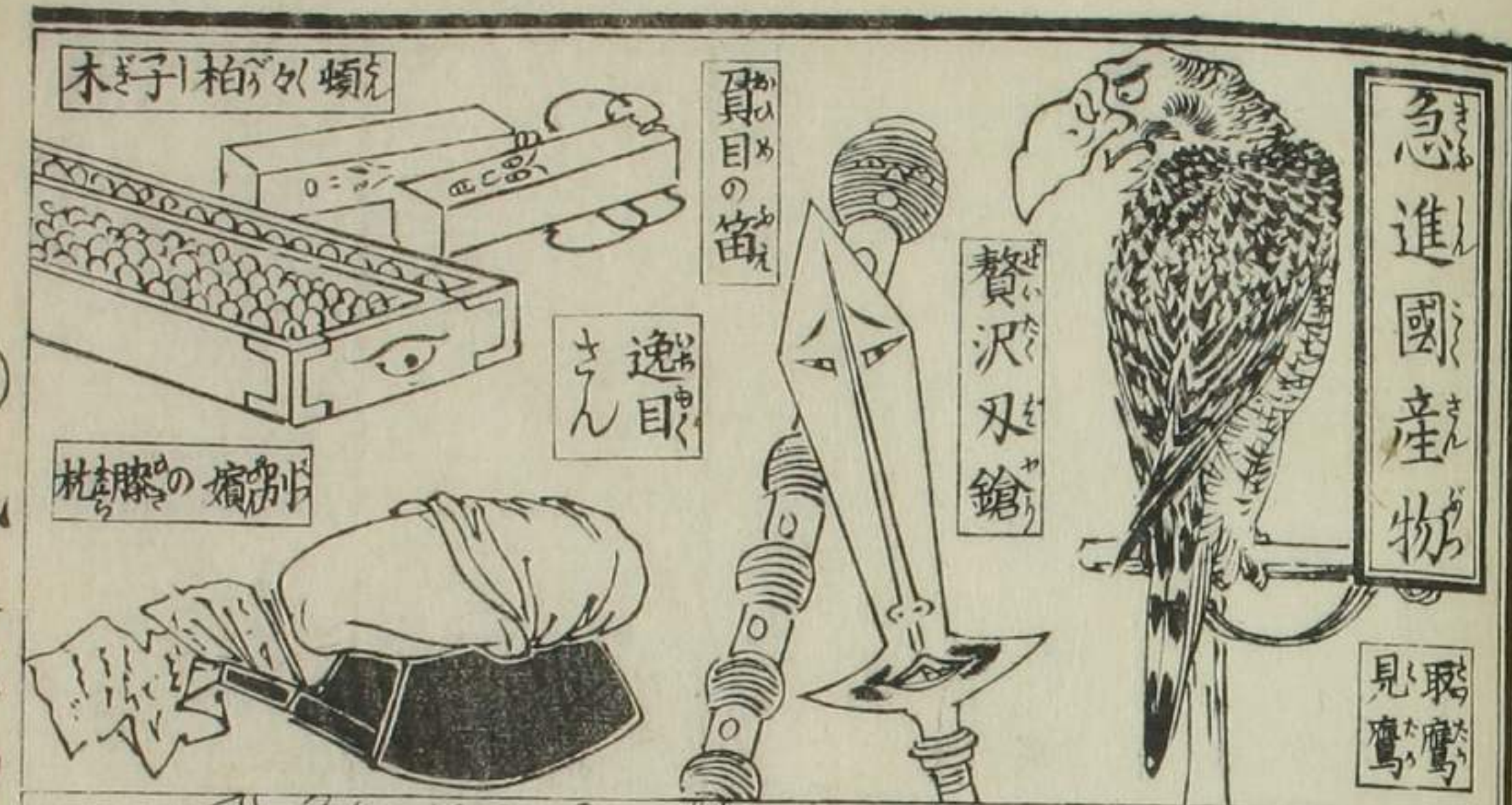
明治廿六年冬十二月

山本良物識 團 圓 齋

山本良物



山本良物言





凡本邦物語前編



凡本邦物語前編

瓜太郎物語前編

前編目録

發端
不自由國
文盲國

後編目録

急進國
守舊國
開明國
畢



解高永澤

目次

異國遊

瓜太郎物語前編

東京

岡本昆石戲作



發端

陰陽師己の身運を知らず算木を置て世の行末を占へば人情ハ輕薄ハ流れて滅法海へ押出し私利ハ帆掛けハ船を走らせると近時ハ有りと聽て往昔埜亞時代の大水を傳言ハ聞知リ者ハ大ハ狼狽ニ巴比倫人の如ク猛可ハ數層の塔を建築て天ハ曰クらん歎斑輪の例ハ倣つて雲へ梯を架ん歎と駭キ世ト言語ほとふゆぬをらひガ世の壁言終リ相談ガ纏らむ分散するガ上策と逃出生脚ハ疵を

瓜太郎物語前編

つ。天窓隠して臂を出し。尻尾を捕る苦しきも原はと
 云へば不為とよき。生兵法が曳興を身の大疵とせ
 きあうら。悟る思案も徳の餘貪して純子の夜着を掛
 けむ。肱を枕の假寐も果報の来る例あり。棚のつたる
 牡丹餅も採らねば口も入らんと無し。口も入れねば風
 味知れず。風味知れぬを評し下せむ。夫の傾城も真
 情あまると云ひ。継母も親實少きとつふも一概に定
 め難し。野夫も枯野の風韻あり。猫も小判の値打ち
 解らず。捨てた核から生えたる柿も甘味多くて頬を
 落し。慾で貫つた重い葛籠に開けて日か身も仇ま
 魔物。世に塞翁の馬の如しと曉たやうで悟らむも小。

虚然惚焉と過去一世の百有餘年その昔安永年中
 肥前國長崎と和莊兵衛とつゝ。者在て魚漁を好む
 小舟も竿さしと釣せむ。ららの常ありしが強風のた
 め押流されて意外の僥倖となり。不死國自在國驕
 飾國等の數國を發見し。次で文化年中亦武藏國神
 奈川も名ある浦島塚の近邊より夢想兵衛ある者
 顕はれて。土地も縁ある浦島仙人より釣竿を授り。そ
 れを骨も糊たし紙鳶も打乗て少年國色慾國強飲
 國等を發明し。歸來その紀行を寫して其倫比斯か
 亜米利加を發明し。替耳敦人が亜伊素國を見出し
 ちると一般の面目を得しが。其後亦七十年の星霜を

經て明治十三年中都下新橋の北より突然第二世夢想兵衛出て狸の大罫丸を以て造りたる輕氣球に乗込。先代の巡廻たる各國を再見して其頗る開明に赴き一形勢を記されたりき。斯の如く既も博學多識見て物の匂を知り。鼻で品の有所を悟る。所謂眼から鼻孔へ抜ける。山葵の粹も甘いのも通と承知の人々。鶴紙鳶又ハ輕氣球と鬼も鐵棒持せたる。時世の便を授りて交りくも遍歴しを羨してハ有ぬども。盲人ハ蛇におぢすと。白痴ほど怖い者ハ多く。鶉の真似をせし鶉の嘲りを顧みぬ。馬も騎て萬國を遍歴んとむやみ駈出たる鳥許者有り。それを奈何ある

者と原るふ今を去るると三十餘年嘉永年間のこと歟。武藏國豊島郡王子村の近傍に白木恒右衛門と云へる武士の浪人ありけり。常にこれといふ職務もあらぬを村内の子供を集めて物讀むこと等教へぬ。その心底正しくて篤實敦行せし稀あり。妻の名をお犬とよびて夫も貞節を盡し正首立働へを其家富みハあらぬども最安らか小世を弼りしが。恒右衛門ハ四十小至るまで子といふ者無きより。夫婦久しくこれを歎くと。虽も人力の及ぶべきことあらぬ。争何とも術あり。某日妻のお犬夫を云へりけり。吾們過世悪くして歟子を拳す。子孫是より斷絶せを最

武藏國豊島郡王子村の近傍に白木恒右衛門と云へる武士の浪人ありけり。常にこれといふ職務もあらぬを村内の子供を集めて物讀むこと等教へぬ。その心底正しくて篤實敦行せし稀あり。妻の名をお犬とよびて夫も貞節を盡し正首立働へを其家富みハあらぬども最安らか小世を弼りしが。恒右衛門ハ四十小至るまで子といふ者無きより。夫婦久しくこれを歎くと。虽も人力の及ぶべきことあらぬ。争何とも術あり。某日妻のお犬夫を云へりけり。吾們過世悪くして歟子を拳す。子孫是より斷絶せを最

歎^{あや}えしき事^{こと}あらずや。有^{あれ}然^{ごと}とて御身^{おんみ}の溜^たあらぬ他人^たの
子^こを養^{やし}つてハ木^きノ竹^{たけ}を接^{つぎ}たるやうめて心^{こころ}よからぬ所^{ところ}
為^なあまべし。世^よハ神佛^{かみぶつ}の祈^{いの}子^こといふことも待^{まち}り。當^{あた}
所^{ところ}稻荷^{いなり}の神社^{じんじゃ}ハ靈驗^{れいげん}新^{あらた}おあまし。ますあれハ恨^{うら}ぬやで
も力を籠^{こめ}て祈^{いの}り奉^{たてま}つらむやと云^いふ。恒^{つね}右衛門^{ゑもん}點頭^{うづなづ}
て。そハ俺^{おれ}も思^{おも}はぬにハあらぬども授^まうらぬ子^こを神^{かみ}ノ祈^{いの}れ
を親^{おや}の生命^{いのち}を縮^{ちぢ}むと歎^{あや}。飯^い令^{れい}一^{いつ}子^こを得^えれむとて常^{つね}時^{とき}
病^よ身^みも你^{おれ}も先^{さき}去^いる。こと有^ああらむ。諺^{ことわざ}ハ云^いふ馬^{うま}を
得^えて鞍^{くら}を失^うふ拙^{あつ}策^{さく}と思^{おも}へばそれハ俺^{おれ}素^{もと}志^しハあらん。と
云^いふ。お犬^{いぬ}ハ聞^きもあへず。あら心^{こころ}も得^えぬ聲^{こゑ}を宣^{のたま}ふ。のか
か。妾^{めかけ}年來^{としな}連^つ添^ぞハ侍^{さむらい}もど子^こを産^うむ。七^{しち}去^いとやらん。子^こ

無^なき妻^{つま}ハ去^いとだ。云^いけずや。然^{しか}るを尚^{なほ}惜^{おぼ}ミ玉^{たま}ふ。とて
妾^{めかけ}の身^みも却^{かへ}つて影^{かげ}護^ごし。此^{この}事^{こと}を在^ま在^まて允^{ゆる}し。たまへと。
強^{つよ}て望^{のぞ}まれ。雌^メ雞^{どり}ガす。めて雄^{オス}雞^{どり}時^{とき}とやら終^はり納^{おさ}得^え
し。たりし。か。を是^{こゝ}よりお犬^{いぬ}ハ王子^{おうじ}の稻^い荷^{なり}へ三^{さん}七^{しち}日^{にち}此^{この}
祈^{いの}願^{げん}を籠^{こめ}めて日^ひ參^ま急^{いそ}らざりし。ハ滿^{まん}願^{げん}の日^ひも社^{しゃ}
頭^{かみ}ハ伏^ふて頻^{しばしば}祈^{いの}る。折^をしも白^{しろ}髪^{かみ}の翁^{おきな}手^ても一^{いつ}個^この瓜^{うり}
を携^{たづ}へて奥^{おく}より出^い来^きり玉^{たま}ハお犬^{いぬ}ハ告^{つげ}て宣^{のたま}はく善^よ哉^や
你^{おれ}に。れ。子^こ孫^{そん}を祈^{いの}ること因^{ゆゑ}縁^{えん}あり。その至^ま誠^{じやうじやう}も感^かんじ
て今^{いま}此^{この}瓜^{うり}を授^まうら。故^{ゆゑ}ハ一^{いつ}子^こと思^{おも}つて愛^{あい}せ。べし。必^{かなら}
む成就^{じやうじゆ}通^とき。ふ。あらんと差^さ出^だ給^{たま}ふ瓜^{うり}を。お犬^{いぬ}ハ双^{ふた}手^ても
受^うて耽^たと抱^{いだ}ま。しが。是^{こゝ}ハ假^{かり}寐^みの夢^{ゆめ}。し。て登^{のぼ}り。后^ご忽^{たち}

地懐胎ふあり。月満て男子を産落したれ。夫婦の
歡喜一方あらず。瓜を抱くと夢みて孕みし子あれ
む。瓜といふ字を首に附け。母の名の犬といふ字の肩
の點を下へ打て太の字とあり。瓜太郎と名けし掌
中の珠と慈愛をば。登后幾程もあく恒右衛門ハ
感冒の心地とお臥し。初に當分のことと思ひし無常
の風や誘ひけん。葉餌の効験願はれず。四十一を一期と
して終る黄泉の客とありしを。妻のお犬ハ悲歎の餘り。
落膽してのゆゑある歎宿疴の瘡日増募て登年の
暮死亡たざるを近鄰の口さが無き輩ハ瓜太郎こそ稲
荷の初子といふ云へ瓜の子あれを孤とあるのも約束

の瑞性あらん杯云あつとぞ。借も父母の死后瓜太郎
ハ木から落たる猿の如く近き親族も有らぬ。かゝて
父恒右衛門世に在り頃親しき交際たる真先稻荷
の神主某方へ引取れ。這所小養育れて成長しが形
體ハ生ども意ハ産すく歎親ハ肖すく天稟愚鈍の
くせよ己が勝手の屁理窟を吐て江湖の悪弊を探し他
人の疝氣を頭痛も患て年が年中ごろちやらと百文
で買たる馬の如く喰ちア寐を得意とし。業務と云
つたら何一つ横の物を縦よりせぬと。數回云はく勸
解をば耳するさしと未終り躬ら此家と退身して一
廉巧く行ふとハ若年時誰もある自己免許の愆つ

瓜太郎物語前編

根原循り環りて近年芝烏森の邊に來り。虚心光陰
を弥りしが年齢ハ積て勘平る二つも高齡の令別盛り
可惜ごとみハ天保錢で買れてまだも餘錢を出せ疵
沢山の捨賣者加梅宋の向子でも鼻を撮んで逃せば
ど貧究朝夕に迫れを借家住居の店賃も米屋酒屋
の借錢も次第と層むに當惑ハされど返さう術も無
く。蓼喰ふ虫も好々々や。恁迄困究るその中で常時一
頭の馬を飼措てこそ小騎ことを頗る好む。好むは
好むを物の巧手とやら馬術に長たること。琴高の鯉
墨翟ガ鳶を乗るより自在あり。一鞭あてれば水掻
無きも能く水面に躍り千里を忽地に越え。二度とを

れは羽翼無きも能く雲氣に乗て一時間五万里を馳
るその迅速こそ神変不思議ありと云ふ。有徳奇術
を得し去る幸ひ。借積りたる高利の責を遣はしたる
一牌日本を去て地球を編歴らば犬も歩けば捧る
當り。海月も骨ふあふとやら。復好緯も有るべしと。
思起しが人の老少不定とやら。一度外國へ行くべし
何所の土も成るやも知れぬ。せめてりの見納めは俺
産地王子村に到觀んと。某日虚心走出て行くと
由無し思はず識らず下野國那須野の原不到りて
殺生石の傍を通行する折しも入相王莽响幾個とある
陰火目前に燃ると等しく。眼眩して俺身の在り所を知

らむ。これハ甚麽と目を閉て精神を押静め、霎時あつて瞻望せむ。今まで野原と思想し、所ハ忽焉廣々たる殿中の形勢と変化り。上段の間ハ翠簾を垂下し、裡ハ人在るが如く、聽て優しき女子の聲あて、近來々々と呼ぶを瓜太郎氣味よく思ひつ。蹴踏近寄て跪下けむ。翠簾ハ糸あて、寧ろ如く、くろく、と巻廻る。此胸裡を覗上るよ、年紀二八けつりある美女、縹纏ハ紅の襲せし、袷衣ハ虚焼の熏き、得あらば、月の眉の艶ある柳の腰の逶迤ある。譬ハ櫻の枝ハ海棠を咲せて芙蓉の色香をとめたる風情あて、側ハ後者も無く、只一人坐りたる。打拵天津少女や、影向しけんと

疑はれ。くろくも蕩け魂も消るむ。りあ、覺し、忽地、飄然とくち笑ひ、今迄、此の繁叢りたる曠原ありし、小何時の程あり、景勢愛り、這所へハまわり給ひ、ぞと云へ、美人花の如き唇を閉き、鶯の如き聲を發し、云ふやう。妾こそ何を悪き、往昔支那の殿、子顯れ、て姐已と呼れ。天竺、小渡つて、華陽夫人と云はれ。復、周、入て、褒姒とあり。終り、日本、来つて、玉藻前と称、けら、きたる、妖狐の靈あり。同性相恤れむ、血絡のよ、し、を以て、竹を誡めんと、思ふこと、有き。假、空蟬、の壳を、めく、して、茲、見ゆ、の。夫、生前、無智の畜、類、も、死、して、神靈とある時、ハ過去を、知覺し、未來を



○ 風太郎勿吾前編



美人因を腐
 べ果を説て成
 ち郎の首途
 せといめ同性相
 憐れの情を以
 て酒精漬り
 堰と流す

解高永澤

○ 風太郎勿吾前編

明察を況てや高齡を経て生前を呪文を唱へて
氣隨ふ天氣を動し通力を以て自在に王候を蕩し
天象を占ひ地變を察し得たる妾が今曉る所つゆ
わがりも愆ること有るべきや情惟まを彼飼
馬を憑み外國を巡廻んとお思起みて首途をま
ハ悪りありん。怎生あなたが愛あく彼馬ハ亞細亞の名産
ある私利馬といふ悪馬みて古来彼馬ハ騎て名譽を
得し者を聴す殊ふはまたあなたの血絡めて馬ハ騎る胸
ハ必むせむ信用を失ふことハ人の能知る所今當首
途を停めりも是等の緯より由がぬし乍去昔時とちが
ハ近属ハ無人島へても布哇國へても移住さへてま

耶穌基督
磔の刑に處
せられし右
高弟等宣
教師とあり
て各外國へ

自由の世あれを妾として你的發足を強て停めし推理
もあく你も枉て思駐ることも為まじ。都合お依て左
右せよ一度停れを妾の義務ハ濟ミたり。倘身お迫り
たる緯有て是非共旅行ことお決まを先これを服用
で右よ首途せよ。妾また妖術を以て你を守護せられハ
旅中小腹の空こと無く咽喉の渴くことも有るまじ。努
々疑ふこと勿れと告終り小壘の中ハ酒精漬まを
彼基督の靈が高弟等お通與しといふ萬國言語自
在の舌の一片と公治長の耳朶の一切を授けしと等
しく。翠簾ハ原の如く垂るごとく。颯と吹来る風ハ襟
元寒く馬の嘶く声お驚き覺れを是あん一場ハ夢

嵐太郎物語前編

派出せんと
集會を為せ
し行先の
國語を話得
ざるを奈何
まじりと歎
悲しむ折其
室の天井より
忽然大さか
る舌をり
垂り見り
細く切散て
高弟等の口
今違言を得
まり一諸外

ありけり。登眺瓜太郎、五布蒲團の柏餅、うら首差
伸して枕邊瞻れむ。不思議あるうら。夢に授けり大
る小塚がある。故大に歡びて心裏に思ふやう。往昔和
莊兵衛と云へる者。初め不死國に到りて仙術を得し
も言語自在の通を得たることを聴くも、又不死國の者
自らも有徳通を得ざることを徐福の通辨を得たる。迄
和莊兵衛の言語が通ぜざるを見て知れり。然るに
和莊兵衛自在國その外各國を遍歴し、一時隨
意不言語の通ぜしこと甚だ合點のやうぬ事ありし。
彼道に數百歳の齡を重ねたるより、老耄をまじりて
此事を記洩せし歟。并に左あれ右あま。俺た馬を

國の言語を
自在につり
得るやうな
りといふ説
西洋のあ書
と見えたり

憑りて外國へ到らむを彼の如き秘密の通ハ得難く。有
然不都合目前に興つてあうく、一困るうと有るべき
み、少しも意づらざりしが、今斯二品を吞むくハ言
語聴聞氣隨あり。善ハ急げと早速小桶を煎たる盥
水汲み嗽せいで手を洗ひ。聴てその酒精漬を吞終り
先是で宜と。そり朝飯食る準備し薪の燃掛火鉢
もくぐて土瓶の底を焙らむ。細き煙も今朝もぐら。立
鳥跡をよが砂で漉した水道の水生長清き流も澄
りかぬ。負債の淵に落入て身も差掛りたる困難も。
足手ばらりの有ぬが幸ひ。跡ハ野とあれ山をあま數
人の債鬼どやくと表の方より入来るやうな瓜太

瓜太郎物語前編



郎の屈指數へてある程今日ハ二十日であつて有然恁
 而居れぬし裏口より悄悄出て馬を牽出し。鞍措ひま
 も泣面を蜂が刺したる手誥の發足。多り髪握んで閃
 りと跨り一鞭あてれを馬ハ宛ら飛が如く南方を指
 して空中を走ると見しが忽地姿霞に隠れて何所
 とも無消えりせたり

因よ云ふ物の妖あること狐は優りの無し狐の
 異名をまるとす鳥とつゝも人を魅はまりのま
 るが故とや。唐土の古説に狐ハ千古の淫婦あり。
 其名を阿紫とつゝとぞ。和名抄にも狐の和名
 太字女老女の一稱ありとあり。白氏文集に古

塚狐妖且老矣。化為婦人。顔色好。頭變雲鬟。面
 變粧。大尾曳作長紅裳。徐徐行傍流材路。日欲
 暮時人靜處。或歌或舞。或悲啼。華眉不舉。花顏
 低。忽然一笑。千萬態見者十人八九迷。假色迷
 人猶若是。真色迷人應過此。彼真此假俱迷人。
 人心惡。假貴重。真狐假女。妖害猶淺。一朝一夕
 迷人眼。女為狐媚。害即深。日長月長。溺人心。何
 况寢姐色。蟲惑能喪人家。覆人國。君看為害淺
 深。間豈將假色同真色。此詩ハ専ら女を懼る
 べきこととを云ひし。亦狐が人間に化す報を述
 べたり。又潜確居類書郭璞賛に青丘奇獸。九尾

之狐有道翔見出則銜書作瑞周文以標靈
とす大王褒四子講德論。文王應九尾狐而東
夷歸と酉陽雜俎。段成式云狐夜擊尾火出將
為怪必戴髑髏拜北斗髑髏不墜則化為人
あり。簞簞抄。清明の母ハ化來の人あり遊女往
來のものとあり給ふを猫島少て某人も面られ
三年滯苗ある間ハ清明誕生有り既ハ童子三
歳の暮戀しを尋來て見よ和泉あるとの田の
森のうらと葛の葉とつゝ歌を詠て失ふけ。聽
て清明生長し后上洛の砌り母ガ詠措きたる
歌を什麼と思ひ和泉へ尋行き。その田の森ハ入

てこれハ祠あり。伏拝て母の様子を祈れ。古
老狐出來り。俺こそ你的母ありと云て失たりと。
此外狐ガ人ハ化たること。また奇瑞を示せ。こ
と。古今の書ハ少うらぬと。その中一二を這所ハ記載
て本編の憑所を定めおまね。抑々我國あて狐を
倉稻の魂の使令ありと云て彼の靈を怕るなり。その
祠を建て祀るもの多きも吾妻ハ有名なり。三子。
真先鳥森。三圍の四社あり。有然ハや此太郎が
出産の地といひ又生長の間といひ皆此等の土地
ハたづささるらずと云ふこと無きハ奇あり抄る讀
者作者の用心を知るべし

不自由國

瓜太郎ハ彼馬ヲ跨りて空中を飛行雲を霞と數千里
 を馳りしり。生國日本を發足してその日曠昏一の嶋
 に着いたれ。先當地の形勢を覘む。家屋の建築
 草木の種類云々更あり。人の衣裳風俗も皆異り
 土地多る故奈何ある國歟問たると恭々云れど人
 貌も分兼たる曠昏他國の者と知られぬを往來の
 人の躁歩殊に三十日で忙しきゆ急歟物問掛ても知
 らぬ態返辞もせざ急歩と往きて大に困り果てて
 只向方を瞻れ何品飲商ふ店頭は垂首と居眠り
 十一二歳の小僮あり彼を瞻んと瓜太郎その所を到

つて當國の名を諮ふ。小僮不審貌とて眼を手摺り
 つ。熟々瓜太郎の風体を打睨やり。意奇異人由有る
 りのうふ。何所から来た歟知らぬが此國へ来て國名を知
 らぬと甚麼したとめと云け。瓜太郎。さか怪し給ふ
 が俺ハ日本國の者にて今方這所に着たなり。有然
 國名ハ何れか方角さへも知らぬ。教示給へと謙遜し出れ
 ば。小僮の云ふやう。當國ハ不自由國一名間違國と云つて
 赤道を去ること南方に二千三百余里の孤島あり。近
 年開明進歩して膽の潰れること頗る多し。貴公甚麼
 して此地へ来れるや宴し仕合らまき身もこそあまき。あ
 め。此斜向の羈舎あり。宿を定めて見物仕たまへと。三

歳児も浅瀬を誨らる。馬ね所の新参者忝けありと云
捨て瓜太郎ハその羈舎に到り當分の旅宿を頼み
此家の主人日本の振袖揃ち衣服を着て二丈余あ
らんと思へる帯を胸高に巻締め前裾が開くを防ぐた
りやら太股の辺りを細紐ふて巻きたる形態ハ恰好日
本の婦人が腰帯を締めたると同く。奈何も歩行憎
ましく小出迎ひ日本人と聴て大に歡びて云ふやう。當國
あも近属新聞紙といふ物興つて奸夫情死首縊り形
迹も無き空粹をさるも有るやう小作りたる人情噺を
日々と續けて記載ど。外國も有り。噺を記くこと
ハ、あ、西洋の書籍を賣る者有れどもこれを読得

る者至つて罕あり。そま、當國の若ハ外國ありま
知く。虽も何分その風俗習慣を備細に聴く由無きを
遺憾のらく思ひぬるなり。儼賃ハ要まをまぎ。貴公の
都合で何時までも滞留あつて貴國の譚を聴まし。
又當國の情況をも視給へうと案も相違の牡丹餅
で頬を叩まる物怪の幸ひ是より奥の一室に案内も
き叮嚀に管待れて元来無一物字識あらハ瓜の垢程
も無く薬もさる程も有ぬ瓜太郎ハ宛も近年歐羅巴
の赤髯が日本小来て高慢顔も一一般知らざらむ
知らざらむと為む。聴らむとせむ。猛可に物を
識大態尚も自分と貴重れんハ自國を譽る小若く

と無と富樓那を肖る辯舌で日本の國体ハ恣々あり。政事法律ハ箇様々々あり。國民咸智識博く道徳を重んむれを他人の女房と姦通し者無く。有然未だ七兩二歩の首代を拂ひし者も聴くを妾隠妻を蓄者無ければ色情を悟て菩提心を起し己が妻子を措去し高野山へ登りし者無く。賭博をうつ者有ぬを。ちよば一と半。ちいむあ。元いだう。の語を解得る者無く。深更竊に花骨牌をまざる者有ぬ。靴音を驚て裏口から逃したり。手過火の見舞旁口閉の爲に金を贈し者無く。況人を殺害したり。盜賊を働く者等ハ鉦と太鼓で探すとも決而々々有る。而父父母の九

さぬ淫事親子の中、の芋田樂良夫を譬し教く女房子を孕む孀婦筆尖で胡麻化を管店使先で足駄を穿く小僮。その外継子いぢぢ。嫁いびり等の不体裁る。緯ハ他國の譚を聞ふのこなり。加梅喧譁口論少る。嘘を言く者無く。約束を違へる者有ぬゆゑ。裁判所ハ有れども常時寂寞とて明店の如く。警察官も役務で巡廻ハせられども。犬の川端歩まとい一般常時無事。麩む形勢あり。實に今の日本から視れば昔羅馬の盛時も堯舜の世も羨む足らざる。無くと盡し。尾も尾を附て誇散せむ。亭主冷嗤して云ふやう。貴公の譚ハ亞細亞地方歟。亞弗利加の内

部の如き未開國の者を慕ひもせめれ。當國でハ夫の式の緯一向小珍しくも無く。又善緯とも思はず。只と稟まを不審も思ひたまふが。そハ失敬あら貴公物の道理も疎まが故あり。俺其大畧を語申さん能々耳の孔を穿つて聽給へ。元來國の奸夫を去る者無きハ。其人情の薄き證して彼方で思はれ此方からも口説ハ深いあぢな戀言語を結ぶの神の媒妁もだ難まが人情よて良夫有る者とも姦通づ。吳の大將夫差と云ふ人ハ勾踐の妻西施も羈され近くハ又英國の学士密尔氏が他人の妻も岡惚して終るその婦人を娶りしと聞く苟くも大將たの身ハ禮を崇ん

で義を重んト己を恕つて人を治むべき者あり。学者ハ又た理を推し道を行ひ人を正して國を治むべき者あり。然るも大將学者ですら人情も羈さるれむ斯の仕合も至る平人も例多き無理もあきことあり。又妾隱妻を蓄者の如きハ此方ナら道徳上惡むべき也。骨たれども女の方でハ氣小濟ぬ人と添寐の給金を老たる親も仕贈て恩も報ゆ孝行あり。左るを兄の困難を救ふ實意も多き也。皆是原ハ且那の御庇あるそらあらぬ事ナら只一概ハ惡くも云はれず。又賭博花骨牌を竊ニ行ふこと固より善変とハ云ひ難けれども相場高賣を仕たり。曖昧の會社を始め

計で公然ふ他人の貨財を掠んとする者さく有り有
愆者と比較をこれさく尚充まべし盗賊人殺の如き
ハ人間の為より所為あり有然をこれ無きとて決
而誇るべき緯非也父母の許さぬ淫吏ハ和姦律有
ぬバ罪科あり罪科無きハ其愆れること靡れあり
親子の中の芋田樂ハ相對づくみて自業自得と云ふ良
夫を譬ふ敷くハ女房の才の優れるを表す子孕
む孀婦も阿陀牟伊婆垂と一般の恩あり管店小僮の
大着ハ憎むべきも方今外國の銀行や官庫の役員が
大金を竊取して湯水のやうに費ふら視れむ僅々
九牛の一毛その罪科有て無き如し世に繼子をいぢ

めり實子より可愛氣薄き故めて嫁をいぢる多
分嫉妬魂情の致せるところ是等も凡ての人情あり止
を得ざることあり昔齊の大將魯國に撃入し胸實子
を捨て繼子を蓄ひ婦人の如きまた彼三州山北
戦争小義経に追れて同く實子を措去り繼子を
連退たる經春の妹の如きハ名聞小義を飾りて情を
忘れたる者あり嗤ふべきも復答めべき者も非也又喧
譁口論の無きハ人ハ諂諛の心多きが為あり嘘を吹ぬ
者ハ方便を知らざる約束を違へぬ者ハ謀計を為得
と歎物ハ兩立ハ難し小蟲を殺して大虫を助けろと
唯何事も重きを採て軽きを捨てるこそ肝要ありめ

凡水部語前編 十七



旅店の主人
 倭辯を以て
 無限のうそを
 示す所

瓜太郎物語前編

十八



不自由國此
 旅店子瓜太郎
 針程のこゝを
 棒ほじこ云
 ふ所

解高水
 海

瓜太郎物語前編

貴公未だ俺國の萬事結構する形勢を知給えぬす
話もてしむ。論より證據先明日から緩々と實地小
就て現給へりしと並べ立たる羽目板へ水を流さる
彷彿。無理ちぢつけの倭辯も舌を巻きたる瓜太郎ハ
噫と呆れて開たる口を霎時塞ぎも得ざりしが心裏
も思ふやう主人の譚の容子でハ無理屈極まる風俗
あれど。非除それよも一た所が亦まんざら珍事の無
まとも仕難し。左も右見物せんりのと。こまよみ毎日
亭主も伴られて。諸所方々凡人の聚會も所談話演説
のある所ハ残まると無く。季候産物高況より。風俗
習慣人氣に至るまで。熟々注目して瞻るふ。冬の寒きこと

焼酎酒精ハあろう。水銀まで氷も為る寒暖計といふ
物を製へるとあらむ。夏の熱きこと河水自ら沸騰
て湯治場の温泉も異あらず。錫鉛ハ蕩けて一種の水
銀とある。有然めらる寒中ハ氷の雨降て天窓めら芋
差も地面へ縫付られたり。足も履物も往來へ氷着て
立往生をまぐる者少あらむ。暑中もまた錫の茶壺が
溶け。興茶瓶が溶け。鉛の彈丸が溶けて其所ら一面水
銀だらけも成る位故護謨や砂糖や蠟燭も堪れを
こそ皆水も成て押流さる。出水も井戸と厠と
一所も成て流る。彷彿り。又産物も鼻下の昆龍
あり。燕鳥郷の蝙蝠あり。虎の威を借る狐あり。不締

鱈と云ふ鱈あり。無理無鯛といふ鯛あり。大なる待貝といふ貝あり。狎々鴨といふ水鳥ハ悄悄とて晝の木兎も肖り。真赤を鶯といふ。小鳥ハ能人を誑ま由尻尾を捕へれを窮々と啼て忽地影を隠ま。虫ハ阿別蚊あり。胡麻の蠅あり。果物ハ木毬梨あり。二度びつ栗あり。儲もまた當國の人ハ等級を二種ハ別ちて一を傲族と云ひ一を平人とつふ。傲族ハ常時上ニ立て他人の功名をもリダ為たやうに傲るより名と一。平人ハ己ハ理窟有ても。これを言ふだけの魂情無く。權柄ハ懼れて手足を縮込め。天窓を敲れても利の為ハ平蜘蛛のやうに平伏より恚云ひ一とぞ。這所ハ差當

恐るべく驚くべきこと、云ふハ昔日本の徳川時世ハ水野越前守在役中こそ恚もあり一あると推了れたる。緯みて。弁を甚麼と云ふハ當國の掟みて平人ハ寒中綿入衣を着せ屯。暑中ハ帷子を允さず。絹布を着るを禁ト。疊付の下駄を穿ッせず。家屋ハ承塵作を為し。金銀具を持つを罰す。有然通用貨幣ハ平人の手ハまを涉るべき物あれむとて咸織物の類もて造れども一得有れを一失あるの譬言ハ洩せむ。その層のべらりと薄ま。量目のふあくと輕まハ次難及以運送不便あるも。各人その量目の輕まと共に木葉の如く價を輕むるの意出で。白うら錢遣暴くふこと云

えして。儉約を守り者至て小まきのこあらす。年々多き
火災の都度何千圓何万圓を焼くも跡も鐵治塊も
遺らむ。美し〜〜灰燼も成て消失ふ物幾何あること知ら
ず。當國が次第と不景氣に至り。人民が追々困窮を
一原因と云ふべき歟。案了また當國の人情を現
る心裡より外國の開明を羨して自國の悪弊を歎
悲しむこと少あらねど苟も自國の弊を譏り。風を
嘆くものも左端から捕縛て囹圄に繋ぎ。首を刎た
り磔に架けたり。まゝ不故も。たゞ胸を焼き心を焦し。
目も涙を蓄て足摺仕ながら口のまけねや。宛ら
腰の抜けたる唾のごとく。假令國の爲もせよ今日

の景勢ふ々犯す胸ハ日本で戊辰の騷乱幕府方の戦
死と一般骨折損の草叶揚句。同職も合まぬ犬死と。
君を思ふ身を思ふとやらで。疊の目も油断無く。壁
も生えたる耳の用心。何でも追従輕薄も自國を替
の習慣あり。而又這地も最可笑緯といふハ一町内一
村内毎月一月三四圓宛の給料も総代人二三名
を定措き。その町村内に犯罪者の有る時ハ皆此
総代人その律を引受て囹圄も繋ぐれ流罪も有
る。有然また同伴より科料を出せ場合もその町
村の積金も拂出せ。肝腎の罪人ハ一向構ひ莫く。
賽布も亦費むこと莫し。此外親が子の教育をせむ

ハ道も違ふと云つて毎戸子の有るも無きも幾何宛
歟の遠金して教師を雇ひ日本の驚と一般俺子を生
放ちてその教育を他人に任措き父母の義務を盡した
やうに思ひ居るも外國の例なき譯みて元來父母たる
者の義務ハ子を育て衣食を與ふハ勿論尚精有丈
不躰をあり。金も厭目を付むに教へて生長の后母は
出で推も壓れもせぬやうに立派な人物に育上る筈
を學校へ入門て学ばせらるる。日夜自家に在る
父母の品行を見習はせらるること多き種々の醜體を
示して不知不識に導くこと有るを悟らば當國
でい男子女兒とも七八歳から學校へ入れどその子

が何を学ぶ歟。何の品行をせむ。歟を知らず海のこと
ハ漁師も聞かぬ上策餅ハ餅屋に任せ。一の手
蠅の路ハ蛇が能く知り。性ハ道に因て賢。病氣ハ
醫者あり。教育ハ教師ありとて一切萬端他人に任
せしめて有る。不愕きたるが就之も亦學校の形勢が
思ひ遣れ。某日小學校を見物仕たり。何國も同く
這所より數多の子等を教育せむと。元來當國
の文字可なり。不完全な事不便ありと云て。專
ら外國の文字を習はせむ。宜れども。女子もまで四角
張た文字而已と習はせむ。教則なれど。三年の修
業で俗談平話の書翰をぬき得せられも寔に不

都合あれども、まだ魂消た緯といふ、教師たる者、大
概浅学ありて殊に理学に疎きより、教授の間より、聞
く忍びがたき惑説を嘶して生徒に示さざるの苦々
しき。彼藝妓は藝無く、山葵は辛味無く、唯その名
に背きて影響の人の害を蒙らざるに、無と虽も苟も
学校の教師ありて、理学に疎きこと有らば、世に迷説
と傳へて汎く害を及ばせしむと云ふこと無れど、所愛
は品うまるとやら。當國の者、有徳教師を甘んず
てや。由是非あることあり。話表人畜混合糞も味
噌も一所といふあれは、まだこの夏、人間よりも
禽獸を尊ぶがごとく、大古の埃及人は、彷彿り九人類を

萬物の長とす。ハ世界総てのこゝとあらんと思の外。
當國の者が獅子を尊ぶことの厚き、奈何なる惡魔外
道を由これを以て除退けり。りのと考ふるより、貴人歩行
する先、ハ必ず獅子と叫び赤子も小便さす時、亦
獅子と云ひ祝日祭日、ハ惡魔拂と号して獅子舞を
招き、神前より石を擲りて、獅子を並べ、獅子多く
印鈕も亦獅子多し。境の前立ち獅子を付る、其剛きを表
はまが為めて火鉢の脚にこれを付る、其勇きを示むが為と、故
子供が泣く時、ハ角兵衛獅子を舞し、神輿の先、獅子を擔ぐ
ハ神威の嚴うあるを示せしことを思けれたり。そまのこゝろ、這
里は各人、犬猫をも亦神聖物として敬ひ尊ぶあり。

猫ハ申す及げを犬をも泥足のまゝ家ヲ揚ル做は
しあれを。太郎殿の犬ハ人と並坐して皿を舐り九郎
殿の犬ハ褥に乗て蚤を掻く等増長の甚だしけれど
子等々泥足で上席を味つて犬ガ泥足で上席ヲ構
ふ者無し。外国より犬を飼ふことあつて。日本
も古来より犬を飼措者多りしも。畳の上ヲ揚る
こと無きハ人の坐臥する所あつたが故あり。西洋各国
では室内を泥靴で歩行くことあまを犬をも亦泥
足で上席れども。席ヲ椅子あり。寐臥し臺あれを。當国
のやうは犬と同席するること無し。加禰當国では
健康不育つと云て。枕邊に犬張子を据措盜賊除だ

波斯の王漢
比世西ハ埃及
國人の迷ひを
幸ひ犬猫と
前軍に進め
勝利せしこ
と埃及國史
に見えたり

と云て門口に犬の画を粘措くの習慣あり。各人送よ
他人の箸や使掛の揚枝を穢しとせられども飼猫あり
己ガ箸少く物を食ゆる者あり。又招き猫として土製の
猫を神棚へ据置き布團を敷き茶を供へし何の
為あるを知らせと。虽も。若今漢比世西在もせられ
む忽地また手を濡させし。此國を奪ふべしと。
瓜太郎ハ獨り心裏に合点しつ。是より又濱辺河
岸に到て瞻れを猪牙舟回舟の外船らしき船とい
ふ物一艘を廢し甚麼ある。訊歎と其由を問へ。近
属外國で蒸氣船の造出しより陸地の街道筋猛可
し衰微て。羈舍飯屋云へば更あり。諸商人雲助まで

も難澁まると一方向あらぬとの傳説を聞き。前車
覆くを見て後車の戒めをせねばあらぬと衆人急よ
騷立ち漁舟渡船の外皆片端より毀して今ハ全国
ハ大船一艘も無し。又河ハ橋無きを問へむ防禦の
為ありと云ひ。往來街道の中央ハ幾個とふき小
岳大山筆懸の如く連続りて。步行立の外牛も通は
ねむ。當國ハ限つて兎轡を用ひむ。車馬を使はむ。差
重氣素這地ハ遠征を仕たあらば必む亦數十本の
書翰を山岳へ送つて痛癢玉をお漬むこともや有
らん。實ハ地獄ハ住家とやら。浩國も此上なき土
地と思ふハ人情の常歎。此太郎の旅宿ハ都府の中

央ハ有りあぐ。一寸酒と沽み酒屋へ三里あり。
豆腐を買つても往返四里あり。何の家からも総て井
戸遠く。殊ハ數戸仲間て使へ。中ハハ人の迷惑ハ構
えず。井戸端へ空樽を据て水を滿措りあり。緩々
と洗濯して邪魔ハある者有らば故ハ一桶の水ハ
容易ハ汲難く。鉤瓶を措けを底を抜て捨置き。酒板
腐れとも地主ハ茶ハ酔た態見ぬ。清ハと更ハ
修繕さす。又此國の風ハて家ハ雪隠のあハ所無く。
皆八九戸共同の雙厠おれた。嚴冬の夜ハ雨降る時
あごハ通ふことの辛さハ嘶あもあらぬ位ハ近屬ハ
た郵便といふのできたれども昔日本ハ有つた

飛脚屋より遅くして急用を便せざるハ専ら道路
の凹凸あるが為あり。衣服単物を深まやれを約束
日限ハ有て無まが如く。明後日明後日と逐次延
し是亦急の間合す。此外火小崇ると云て夜中
比米糊を賣る家多。色が黒くあると款年が奇
と款云て茶の吞人有らねを茶を商ふ家無まハ時
よとつて少の不自由あれども。大安賣の看板を
出して高賣をまゝ商家戸並みて。定價正札と付
がら價の掛引をまゝ商家多まゝ信用よありぬ
極底あり男子と女の名をつけ。女鬼と男の名を付け
れを壯健ハ生長と云て。男子とハ亀。ハ鶴梅枝雛鳥

の名あり。女鬼ハ源太由兵衛。清正為朝の名あり。假
令双方都合よきも四目十目の男女ハ永續が無りと
いつて結縁をせむ。夜中爪を採るを嫌ひ。耳の垢を掘
るを禁ト。唇笛を吹くを許さむ。手羅を掛て飯を食
みと余計ハ食つと云て雇人等ハ別てさせむ。下
駄を洗ふと雨が降ると云て洗ふと無ければ何程泥
だらけ汚れても其儘で穿ぬをあらむ。覺が悪くある
と云て小指の爪を採ること無ければ皆一寸以上
延てり。故當國の醫者ハ藥劑を調合する金匙の代り
ハ小指の爪を用ひるより助うらぬ病人の緯を醫者ガ
爪を投たつても可笑し。又手習する者硯を洗つを

手の上達ぬと云て洗ふらと無き故に數年前の墨槽
と塵芥が積つて蓋もできぬ程盛上りたるを睞て。彼
塩梅で、后日能筆も成ららうと評判高く。其日
搗た餅を炙けを火の崇るといつて竊りとでも炙た
ことと知れ、を重き科に處せらうと等。万事万端の不
自由と頓間違つた緯可。瓜太郎ハ呆れ返り。漱半分
とつゝ俚諺あれども。初め亭主の口振とハ金と反對
結構杯といふ形迹もあまき虚捏。恚る不便の國が復と世
界も有るべきや。聞て極樂見て地獄とを能く云ひ
ものうふ。噫。饜果とと心裡も思ふ。郷に入ると郷に従
へとや。元來諂諛の氣もあらねども薬も病症も適

せざれを害に有るも効能無し。こんふ所て諫言申
れを聞れ申しと身を危る。こりや敬而遠ざらるが上
策と。浩く結構な國に生れた人民の幸福あり。俺も最
些滞留仕度思けぬ。あらねども尚是より外諸國を
巡廻く所存あれを殘惜くも暇申せと曩も布哇國
帝が日本を去る胸のやうに滅多矢鱈と賞賛して。そこ
へ旅店を立出で彼私利馬を跨つて海辺より水面を
馳ると見え、何方へあり歎駈行たり

総評

人自ら己を稱て他を傲る。我身を愛する。相
違ふも。自ら己の欠点を省きて不満を懐く者

る其愛未だ及ばざるあり。父母の我子を見て
鄰家の子より賢く伶俐きと他を誇る我子を
慈愛むる相違あまきも。尚その賢きを進め伶俐
を増んとまき素志を非を隣家の子の賢く伶俐
あるを見て我子が彼より劣りしを歎く尚我子
を進めんと素心あり。有然また自國の政事法
律を始め人の風俗習慣をも結構最上無比満足
ありと外國を誇るハ固愛國の赤心より出る相
違無きも。未だ自國の不良を歎き。智識の狹隘を
憂ひ。道德の少きを譏り。風俗習慣の卑きを奉て
不満を懐く者も。その愛心及ばざるあり。此不

自由國の如き。設令心裏に不満を抱くも
外人に對て滅多無上。自國を誇るの事あら
ず。稍高もどまき。追従吐く者を挙用ひ不列差
普斯の如き忠言を者を罰せられた。人自ら懼
れて實を吐す。有然事物に當て輕重を權ら
んとまき。實量を愆ること起れ。不便あるこ
と弥不便あり。危き弊弥危きに至る。夫能く
天下の危難を扶ける者ハ天下の安泰を據る。
能く天下の憂害を除く者ハ天下の歡樂を享
く。能く天下の殃禍を救ふ者ハ天下の幸福を
獲る。苟くも人の氣風皆此不自由國此平

人一般國を報ずると云ふこと無く専ら
 私利の爲に或は甲の意を窺ひ或は乙の嫌を
 避け彼の旨を奉じて御尤千萬と云ひ此の心
 を迎へてハ左様で御坐ると云ふが如き卑屈
 魂情に至らざる終に奈何あることとに至る歎
 一國の文明進歩も又眊も仍て退歩も
 こと無きを得ず支那印度埃及の文明が中古
 衰へたるを視て知るべし國土を愛さざる者ハ其民も
 あらざるあり公益を計らざる者ハ我同胞もあらざる
 あり今外國人が我國を蔑視し我同胞を蔑視するも
 断念してあるを其國民として愧ざる者有りや無きや

文盲國

人間の一生涯七轉八廻ありと歎貧富窮達ハ眊も
 機運あり古今世も富を得る者果して道を以て
 る歎土藏庫ハ必に積善の看版もあらざる八字の鬚
 ハ決而博識の保証もあらずと俺身貧乏も媚を
 賣るを好まず不義の富貴を羨まむた朝ハ目覚
 し不飽轉餽を沢山喰込み夕ハ寐酒も暑翰で多量
 由吞ぬるありみ下物好むの氣隨育ち自由な生活
 何を何とも歡樂とす瓜太郎ハ不自由國の滯留
 子堪りかね永い浮世も短い生命とんる所より
 と永居をせよハ白癡々々何所ぞ自由の國有ら

を一息吻んと駈出しが大約四五千里程を過ぎたる
時最大ある國あり。有然先づ形勢を覘んと濱辺より
上陸して八九丁南方より行けを町家軒を并べて隨分
繁昌の土地あり。町の名を問へば文盲國の都府春屋
の日町と云ふ。聽て此地有名の爵舎あり。若良洲屋無
理右衛門方より旅宿をとつて。當國の情況を視る。不
人民字を識る。憂苦の始りありと云て手習する
者有らぬを己の姓名を書きたる者靡く。適々泥中の
蓮ともいふやうに俺不便を悟つて少くもり手習
仕たり。學問する者有れを朱子交れを赤く成る
といふ里諺もある。から油断ハできぬと云て。彼と交際

とさせし父母も靡く。又自ら交際ふ輩も無し。有然
また天稟習字を好む。讀書を嗜む。子有れを有徳
了簡達ひの者より跡目相續ハさせられぬと云て。勘當を
仕たり。懲めの為より親類へ預けた。里生る。父母ハ。躰此
良き人ありと近所で評判し。彼亦伶俐き親の子
奈何して彼様を悪漢が出生たりあど、云ひ難きを去
れさへ嗤ふ。堪たること。だも諸表毎年六月中の丑の
日は全國の人民を裁判所へ召喚し。て手習を仕た。款
仕あへ款を問糾し。仕た者をも重き罪科を處し。
不為と明言もめ。不為念だと云て。昔日本の長寄で
耶穌の十字架を踐せたやうに。菅原道真の梅鉢の紋

を踐せしことの定例有り。凡て當國人の説を聴けを昔時唐土とやらの白癡言は物ガ費ねを一字千金の價有りあると、出放題のことを吐せし。方今外國より半紙一枚へ三四百字を寫して漸く七八厘より一錢位は賃錢を得る者有りと歎聴く。尙この塩梅で下落をれを近々よ千字一文の價もあらんと思はるあり。文字を習ふとら此愚ある是をりつて知るべし。傳聞く支那日本あどつふ國より古より今より掛物や額面は文字を寫して詠めると有りと歎云ふども甚だ合点のゆくね緯ありき。元來画を見て娛は坐して襖は三保の風景をのぞく。掛軸は瀟湘の八景を瞰め。倫敦巴

里の熱鬧も一面の額中より顯れ。深山幽溪の形勢も一枚の扇面は架すの妙あり。而その能く實物真景を寫したる物を巧手ありと云ひ。肖與らぬ物を拙手と云へり。然るも文字は一切據す所なく。唯先人某の筆も同一あり。古翁誰の書は彷彿りと云ふまでのこととみて有れむ。これと暇めて娛むこと外國は例無し。是亦文字は價の無き明証もあらむや。近年世は小器用みして數國の語を學び。多くの書を讀みて自ら學者と稱する輩尊大にして世事は疎く。徒らに廣博を誇れども毛唐人の糟粕を嘗み。赤髯奴の垂涎を吸ふことこの巧にして。自ら仕出せしとハ夢はだも知らば。口は政事は



の如く境臺の見世物許多有ども。其中搦撲力持の
小屋最も多く見物の衆皆腕を張り肩を怒りし。
正が最負の力士が勝たる响あど真氣の沙汰と思
はれぬ為体よて外目の者も甚だ苦々敷あれども。又
天竺の摩耶大臣日本の野見宿称ハおろく樊噲沙羅
孫の如き大力ありて或ハ酒樽を下駄のやうに穿歩き。
或ハ城門を敲破り。窄門を擔ぎ。殿堂を押し等これ
實見せぬ者ハ虚言とて思はれぬ程の膂力ハは
驚くぬ者無し。然るに話表甚だ怪しき譚あり。此
國よて恠る驚くべき力士もその臍の垢を除れ。忽地
力抜けて普通の人よりも弱くあること。彼沙羅孫の頭

髪を切放ちたる。異ありむと欣閑話体頭彼方の
小屋よ入て觀れむ猿を的にして弓を射り。その痛ま
堪へむ狂廻を面白くと嗤ひわら。外國の者も怒を
催ふさむと云ふこと無し。此方の小屋よ入て觀せむ
親を白眼だが為よ平目よ化たといふ少年と人の周囲を
旋つて蛇も成たといふ娘の綱渡りハ大入るて爪も立す。
向ふの小屋よハ夢を喰ふ獺と三年未來を悟る鴉
の見世物あり。母が無性で柄杓から水を飲んだが
為生れ出でたる柄杓の様る子供ハ一本脚で。床
躍をあし袋を破らむと捨てた母の因果が子よ報た
る。袋子ハ猫紙袋を冠せたやうに遅々と動いて腹

の皮をとりせ。蛇虫も嘗られて全禿頭も成たといふ
 女ハ天窓の輝で見物の眼をまぶしうも。犢鼻禪を締
 め陰徳の陽報も依て陰莖の大きく成大男ハ亀頭も
 曳臼を振下て人を驚う也。此外無筆の学問と名けて
 歌舞伎芝居彼所此所も有れども狂言手態ハ實ハ
 狗尾もて俳優ハ常時水性媚婦や湯楽娘を欺らふ
 して金錢を巻揚ふことを本業とせると。欵瓜太郎ハ
 是等の見世物を見あから蹉跎裏道も出て東へ四五
 所行けむ公園地あり。何野園といふ。伊甸の花園も肖
 て最珍しき草木多くある中も。碌手梨といふ大
 きか梨ハ今年當り年と見えてぶらりと沢山も生下

り。葉實柿といふ晒柿ハ赤くて報面の如きあり。青ざ
 めて皺びたるあり。又摸蓮。屁茶壺蓮といふ蓮ハ大池一
 面も生延つて今を盛りと花咲く。岸も一六菖蒲と
 いふ菖蒲あつて暫時の間も美しき花開くも有れど
 目叩うちも凋れたりの多く。殊も此菖蒲も限り花咲
 さうみして咲損ふりの多きハ惜まぬ者として無。此
 公園の東方の隅も秦始皇帝を祭りたる社あり。これを
 信仰せられを学者も成ると云ふやうな了簡違の者ガ
 できぬと云て。常時参詣人の群集夥多し。咸無学長
 久子孫文盲を祈る。是より公園を出て食杉森吞杉林
 といふ二つの森の北も大河あり。鉄面川と云ふ。これあ

嘘の川化の川といふ二筋の小川一河もあつて此も流
 るゝあり。此一町程河下も一寸橋といふ。短いやうに
 長い橋は袂も高札を掲ぐ。里言も界も入てハ禁を問
 へと飲店請証書も差配の権柄御高札を拜見と記
 せも長家も仕来り定例甚麼も事やあらんと真正
 直も近寄て見上も皆画様を以て一切の緯を示せと
 思はれたり。第一藏も封印仕たる側も大まか熊が這
 突張て頭を搔まわらハ大工の熊公が身代限りを仕たる
 告示もて肖白の芋ダハ頭を切てゐる服も衣服の模様縞
 柄を画きたるハ芋屋の息子も親殺をして逃亡仕たる
 と探せ又相書あり。成程こもも無筆の者もハ便利の

仕方である。可嗤さハ忍へておせと。先刻から我
 慢で堪へ尿を放んと廁を探せども。近頃の日本
 と異て。當國ハ川端や四角も皆（）と画きたる板を
 立てる。路次も入て放んとせよ板扉板羽目も陰莖
 の傍へ（）を画きたる板が張てある。こもも當國の小
 便無用といふ示表もて日本のやうも道端もあつる。廁の
 周囲も糞を放れ小便を流し嘔吐をはき散まるとの
 無も宜けれども一寸小便を放る所無もハ甚だ不便
 と云へばハ一利一害止ことなき。双方宜こと有らぬ有
 理も堪られぬ何仕ようと揉替仕あつら傍ある家も
 這入て廁を借受け嘔と一吻氣も霽々重荷を卸した

心地しと蓄小便を放りあがら合掌仕つ、考ふれを當國でハ皆家の椽先より庭へ築出しと厠を建てるが故に婦女ハ更あり男でもら放尿の音が主人に聞えそ氣の毒千萬況て出物腫物所柄と云へ大音尿をを放魚れども薬千服も相當を適も遺憾と。瓜太郎ハ陰と成りして匆々小飛出し。主人に對て禮を述べ終り。儲則の建法の最不都合あるを誥言を主人自若として云ふやう。貴公知り給はずや。朝鮮と云へる國でハ賓客と對話を演あがら其席の壁へ小便を放掛け厨の流板へ糞を放ること常ありと。こま野蠻と云ひもせめ也。近属文明國と自ら誇る歐米の人々でもら

坐席の隅に糞椅子を据措て愧とも極り悪しとも思けず放散をこと當國にあり。庭先の厠より餘程々々甚だしと聞けば成程そまも有理何と答ふ辞も無く。瓜太郎ハ唯天窓を揺るる折し。後の襖押開て出来る婦人有り容貌ハ七八歳の少女に相違無きも白髪頭より腰の屈曲たる形態ハ五十余齡とも見ゆ。故此婦人こそ南亞米利加にありしと云へ。返切泉で顔でも洗ひし者歎と。餘り怪しく思ひて其由を原を。此婦人ハ幼少頃漆器へ顔を映したるが為、幼貌失せしで五十餘の今も恁有しこそ愧かしと。もと。真面目さつて答へたる。因縁嘯を白癡氣しと

有繫^{きま}と唾^{つば}ありも笑^{わら}はれむ。空感^{くうかん}服^{ふく}も雪^{ゆき}隠^{かく}を借^かりた恩^{おん}
義^ぎも寸志^{すんし}の報^{むか}ひ。有然^{あるがごと}か暇^{ひま}申^{まを}さんと門^{かど}辺^へも出^いて此^{こゝ}
家^やの軒頭^{のきさき}を顧^顧れむ。口^{くち}を擔^{かつ}いで蒐^{あつ}け行^いく態^{さま}を画^{えが}き
たる看版^{けんぱん}を架^かけたり。是^{こゝ}あん口^{こう}上^{じやう}使^し仕候^{しこう}とつゝ看^{けん}
版^{ぱん}あて俗^{ぞく}もこれを當^{あた}然^りの看版^{けんぱん}とつゝとぞ。日本^{にほん}もど
で曲形^{まがなり}も皆^{みな}書状^{てがみ}グわけをこころ。昔^{むかし}時^{とき}より手紙^{てがみ}
使^{つか}ひあり。方^ち今^{いま}また郵便^{ゆうびん}の便^{べん}利^り有^あきども。當^{このころ}國^{くに}ハ無^な
筆^{ひつ}者可^りで文字^{もじ}の味^{あじ}を知^しる者^{もの}有^あらねむ。書^{てがみ}状^{じやう}郵^{ゆう}便^{びん}の
便^{べん}利^りを悟^{さと}らむ。浩^{こう}らとぐ通^{あたら}常^{じやう}だ^いと心得^{こころえ}めらふ。惘^{あつ}然^{ぜん}至^し
極^{ごく}あり。有^あ然^{あるがごと}當^{このころ}國^{くに}ハ習^{てあ}手^て讀^よ書^よをま^かる者^{もの}有^あらぬ。子^こ
引^ひ替^か男^{をとこ}も女^{をんな}も遊^{あそ}藝^ぎを習^あふことと専^{せん}ら流^り行^くして。殊^{こと}小

女子^{こなん}も五六^{ごろう}歳^{さい}より皆^{みな}躍^{あそ}之^の味^{あじ}線^{せん}を習^あせずとつゝと
無^なく。今^{いま}日^ひハ師^し匠^{じやう}も伴^{とも}けられて祭^{まつり}祀^いの屋^や臺^{だい}も躍^{あそ}り。明^あ日^{にち}
ハおさらりと待^{まち}合^あひの二^{ふた}階^{かい}も誦^{うた}ひ。伊^い達^{だて}を盡^{つく}し綺^き羅^らを飾^{かざ}
ること。恰^{ちやう}ど日本^{にほん}で父^{ちち}母^{はは}も子^こ供^{ども}の学^{がく}費^ひを出^だすやう。親^{おや}
等^{たち}ハ質^{ちち}を措^かき借^か金^{きん}をしても。其^{その}衣^い裳^{じやう}道^{だう}具^ぐを調^と度^どふ。
故^{ゆゑ}も子^こ供^{ども}の方^{かた}でも習^{てあ}字^じ讀^よ書^よ等^らと異^{ちが}つて面^{おも}白^{しろ}半^{はん}分^{ぶん}年^{ねん}
齡^{れい}もゆるぬ。髻^{むす}を撫^なで。衣^え紋^{もん}をつらり。あだふ浮^う名^なも真^ま
實^{じつ}も割^{わり}ていと。以^も人^{ひと}さん。有^あるを見^みせた。胸^{むね}裏^{うら}。いつ
嬉^{うれ}しき逢^あ瀬^せもと月^{つき}老^{らう}もねぎごとく。合^あ鏡^{きやう}の影^{かげ}暗^{くら}くも
せ。た容^{よう}子^すも頭^{あたま}けり。小^こ癩^{しか}も身^み態^{たい}や厭^{いと}しき風^{かぜ}をまを
見て。人^{ひと}らも人^{ひと}あまを裏^{うら}恥^ぢし。服^{ふく}下^{した}から冷^{ひや}汗^{あせ}を流^{なが}



まぐさる。當國の父母ハ却てこれを歡ハお巧者ヲ成
す。たと欵。智惠付グ早う御座りませと欵他人ヲ
對て誇面せらハ傍ら痛きこと限無し。有然から子
聽てその子グ年頃も成長て結婚せらも親類交際
の書史ハ更あり。請取書由まんそら書得ぬと羞を羞
と思はぬ者ハ愧うハ大例ありと欵親ハ當人も羞の
の字とも思はぬハ呆れかへつて物由云へず。話表當
り障りガ無いと云て男女とも寄ると觸ると淫語を
まてけうだい揚句の果も膝を捻られ脊中を敲され
を却て歡ふハ當國の者も限るといふ。又壯建あるハ當
然だと云て懲を父母有らぬを。十二三迄の子供ハ惡

戲を仕せうだい。父母を白痴し。賓客小からりふ。三
歳子の魂百歳まぐと。成長てハ人を視て人臭いと
思はぬを。親の頸へ繩をつけ。良夫の貌へ泥を塗るを左程
惡事とも考へぬ。是等ハ畢竟奇者も集る者も
讀ん同士書ん同士なるの故あり。孟子の母が鄰を
ミたるも。うさりと瓜太郎ハ獨り合点。尚追々細
蜜な緯も意を注げて瞻れぬ。書ぬ者理も疎しと也。
這里もまた。至極白痴氣たる緯といふハ各人方角
を撰んで東方へ轉居べきを南方も移り。此所より
漸く東方も引越せら弦と弓より迂ッ遠婚姻も必
を相性を占せせむと云ふこと無ければ良縁を外し

て年頃の者を手元てもとに措かき。燈臺とうだい却かえて元暗もとくらしと虫むしの
 附つたハ此こゝももりりむむ。脹出ふくらしたる腹はらを悔くやむハ喧譁けんご過すぎ
 ての棒ぼう千切ちぎり今更いまさらせんす泣なむむり。各人ひとりひとり毎年毎年初物はつものを食く
 ると七しち十五ご日生延にっじつると云いて茄子なす。胡瓜きゅうり筍たけのこもどすてその
 出初でいしょの味あじひまづき物ものを賞美しょうびして競きそひ食くらひ。九日くわにち茄子なすを
 食くふと長命ちやうめいをまると云いて毎月毎月九日くわにち十九日じゅうくにち廿九日じゅうくにちハハ加
 子こを食くらぬぬりの無なく。砂拂すなはらぶると云いて毎月毎月一度いちどづづ薬い
 薬いやくを食くらぬ者もの無なく。三十日さんじゅうにち蕎麦そばを食くらふと小遣錢こづかい困こま
 らぬと云いて質しちを措かても食くらふ者もの多おほく。鼻孔びやくへ物ものを食くらふ
 と長者ちやうぢやも成なると云いて故意こぎと暗闇くらやみで食物くわいものを鼻孔びやくへ
 押込おしこめて咳せりへれを誰たれも己おのの食物くわいものを惜おしんだと云いて怒おこる

者多おほく丑うしの日ひハ鰻うなぎを食くらふと良薬りやうやくもあると云いて當日そのひ
 殊ことに値あたいの高たかき小構こくまえず食人くらひての多おほきも。女房にようぼうハ良夫りやうふよ
 烏芋くわいを食くらせむ。椀わんで飯いひを食くらふと痛飲いたんがかこりらぬと云い
 て陶器たうきを用もちひる者もの無なく。飯いひの腐くさたのハ中あた毒どくぬと云いて
 食くらふ婦人ふじん有りあり。寐ねるさまま立たて物ものを食くらひ。飯いひの食くらたを
 小菓子こかし有あり付つき。多量たうりやう食くらふを名譽なまとなす。飽あたたと云いふ
 者ものも勸すすめて食くらはむを禮式らいしきと考かんがへ音聲おんせいが美よくと云いて
 蜒蚰あまを吞のむ人ひとや。愛敬あいきやうが出でると云いて雜巾ざうきんで魚ういを拭ふく
 者ものや。櫛くしを落おちすと苦くが消きると云いて買立かひだの櫛くしを故意こぎと
 道路だうぢへ落おちして歩ある者ものや。虫むしの薬いやくももると云いて薩摩芋さつまのいも
 の真身まみより皮かわを食くらふ者ものや。夏あつ季きハ熱物あつものが腹はらに薬いやく

だと言て甘酒あどを吞む者や。桃の虫は良薬ありと云て故意と暗闇で桃を食ふ者ハ當国に珍しかりむ。茲にまた異體奇相の物を神とて信仰する中、大陰太陽を最も重ある神とて崇めるより朝起すも太陽を拝まぬと云ふこと無く。肚を祈ぬと云ふこと無し。有然をまた日蝕月蝕を大陰太陽の煩ひと云ひあり。有恂响あり罰を蒙むると云て戶外へ出る者無く。勿体ありと云て干物をまざる者無し。月近星が顕するれを凶事の前表だと云て憂ひ。何事も善惡を拘けらむ。二度有たことハ三度有ると云ひ。又三度の神を正直と信ト。寒中燈油を溢す者あれを火の

崇と云て水を浴せ風を引せると一年何人しと云ふを知らむ。福を帚出せと云て夜中家内を掃せむ。仲が悪くあると云て揚枝尺度を手渡ししむ。陰膳を据れを腹を空せことと云て無と云て朝飯食たす。終日けつ付歩き。腹を空して目を眩む人も寒水を吞むと水毒が仕無あると云て。呷々水を吞で腹を下痢中の有れむ。素人よりも劣た庸醫者もかつて。河童の屁飲馬の尿のやら薬を腹用て。平氣の平左衛門で死ぬる危険で見ても居られず。耳朶の大きき人を福人と云離し。額の廣き者を好運なりと羨み。手の掌が痒つと貴物が有ると云て歡び。衣服が増加ると云く

春画を蓄つる娘ハ拳て算ふるは違あらば殊子後承
妹同士ハ鴨の味がまると云て結婚する者多く縮毛
の婦人を好む者有れども旋毛の片寄た者を嫌ひ貪
乏まると云て枇杷を植る人あく病人がでまると云て
葡萄を植る人無し。死去だと思はれた者ハ長命まると
云て歡び鼻下の長い者も亦長命まると云ひ烏小
糞を放掛られた者ハ運が好あると云ひ雪隠で地震ま
逢た者も亦運が好あると云ひ焦飯を好く者ハ麻臉
面の者と連添ふと云ひ粘飯を食ふと立身仕るいと
云ひ飯桶拂を食ひ朝飯へ茶を掛て食ても亦立身仕
あつと云ひ瓢箪を携てゐると轉むぬと云て老幼皆こ

れを腰に着せとつふくと無く。土製の鳩を膳に掛けむ
胸に問つるくらと無く。云て飯時よこれを据指せと
云ふくと無く。猶貌を撫てその手耳を裁せと雨降ると
云ひ釜を火に燻て彈れを天晴ると云ひ糞豆屋が来れ
む八時と思ひ豆腐屋が来まむ十時と察まると故に
晴雨儀時器ハ當國に用無し。障子へ鳥影が映せむ
来客があるると云て坐席を片付け客が長坐をまれ
む竊に幕を逆さ立て又その履物へ灸を据るころの
あり。流行目を病む者有むを親子兄弟の見界も無
く寄て集て彼を白眼めくらまらつたがらぬ児ハ奸夫の
子だと云て父親ハ彼を惨酷あつと云ひ蛇蜥蜴を指し

をまを指が腐ると云ひ。廁で天窓を搔くも亦指
が腐ると云ひ。枕を投ると頭痛中ち小成ると云ひ。
報酬紙を懐中へ入ると盗人よ成ると云ひ。庚申の
晩に交合ると盗人の子が出生ると云ひ。唇の薄い
者を多辯だと云ひ。鼻孔の大まゝ人ハ錢費が暴い
と云ひ。巧手ハ火を興む者を世帯持が宜と云ひ。飯
へ多く茶を掛る者を實が無いと云ひ。茶初穂を吞
むと憎れると云ひ。秋の茄子ハ新婦ハ毒だと云ひ。
香物を續けて切る婦人ハ嫉妬やまたと云ひ。香物の
食掛を食ふと仲が悪くあると云ひ。二人同時ハ火
を吹ても。櫛を貰ても亦仲が悪くあると云ひ。爪を火

も燻ると狂人よあると云ひ。又真似をまると阿魔雀よ
あると云ひ。夜中爪を採ると親の目へ入ると云ひ。足袋
を穿て寐ると親の死目小逢りぬと云ひ。人ハ唾を放
掛ると癩がでまると云ひ。火戯事をまると寐小便を
垂ると云ひ。飯の食立る寐ると牛よあると云ひ。蟻を
喰ふと力が出ると云ひ。魚の眼肉を食ふと石胞が出
来ると云ひ。寺の地内で轉ぶと三年生無と云ひ。人の
胸を打た者ハ枇杷の棒や箆で打たきた者ハ亦三
年生無と云ひ。胡蘿の好む者を多淫と云ひ。考出し
唾をまると者ハ亦多淫だと云ひ。突くと泣く者ハ
壯健だと云ひ。歡び朝坊主ハ縁起が宜と云ひ。祝ひ。

明日の事を云ふと鼠が嗤ふと云ひ来年の穽を云ふ
 と鬼が嗤ふと云ひ舛の底を敲くと鬼が来ると云ひ
 膳を扣ても亦餓鬼が来ると云ひ三人で蛸帳を釣
 れた魔が出ると云ひ慾の無い者ハ蘭が當ると云
 ひ天窓へ芥を附てゆると三百損せると云ひ針を足
 の裏へ立ると天窓迄登ると云ひ尺蠖は體長を度ら
 れると死ぬると云ひ枕を頼で寐ると好時を起まされ
 ると云て入る物云ふやうに頼む者あり柵を噛で
 寐ると魔れぬと云て無性な噛で血を出し痛く小
 堪兼て終夜寐付れぬ者あり木の實を手球を取
 と翌年生らぬと云ひ虫を火に焼くと殖ると云ひ雪

を犬の伯母さんと云ふハ餘程無理な親類合あり
 目が影て雨が降る胸を狐の嫁入と云ひ鳥が啼けむ
 氣も掛け鼻緒が断れを即り氣も掛け雷ハ雷獸と
 つふ獸が鳴歩まき落れを臍を揉るとその鳴る時
 小ハ皆線香を立て臍を隠し河童が腎子球を抜くと
 云て初夏小川へ胡風を流し腎子球の代り子あつた
 川の近所に住む者云合せたが如し月光で針穴
 を通すと目性が善くあると云て勞ふ人の目付ハ車
 亂ガ螢燐を集めて書を見し胸も恚やあらんと思
 れたり此外四十二の二歳子を假し捨て他人の坐つ
 た跡を三ツ叩いて坐り嚏が出れを両肩を三ツ敲

ま。虫齒から虫を生捕り。脊中で目星を焼くとつやも
訳の解らぬ迷ひの習慣。什麼ある白痴が言出したる
穢歎一犬嘘を吠て可犬声も吠るとやら。固詰る事を
言出せし者ハ憎むべしと。虽もこれを悟らむしと
迷ひぬるハ無学なりの故あらんと。瓜太郎ハ一々俺
身ハ推當て心裡ハ思ふやら。噫。他人事だうらと
そ恁も能く悪蔽の視えりあり。俺今是等を嗤ふも他
人ハ大俺を視る胸ハ必ぢく嗤ふべき穢多めるべし。
有然バ浩る迷ひを見物するも亦俺ハ悟ること無と
云ふべからむ。今ハ乗掛大船も同様逆ものごとく小最
少ハ見物せんと旅宿を立出んとする折しも。亭主

の云ふやう。貴公未だ知り給はずや。當國ハ時鳥
の初音を厠で聴けば身ハ禍殃ありと云ひ。芋畑で
聴けば幸福ありとて。昨今最早啼く時節あれを芋
畑ハ出張で終日耳を敬てる者夥多し。其が為小
孰れの芋畑も皆群集するごとく。神佛の祭禮縁日より
由賑りなり。小可も今より出掛る積り。御都合よるハ
お供をせんとも。瓜太郎ハ最珍らしきごとく早速
亭主と同道して近所の芋畑ハ到つて見れを。雑踏
するごとく花の時節の隅田堤上野飛鳥の山より。遙
し人ハ多けきど。咸一心ハ初音を聞くと或ハ空を
眺め或ハ耳をけぢりぬるが故。べんととも。ちやんととも。

音がせむ。唯黙然と立在むの。往來の子供ハ團子の
替りハ蝨の串刺を食ひなづら歩く。これも誰が癡
言した事やら虫の糞を成ると云つて當國ハ父母
が勸めて食せると云ふ。又馬の糞を知らむも淺
丈が高くあると云て丈低き者ハ目を眠りて故意と淺
付け。笈を冠ると丈が低くあると云て丈高き者ハ人
目を忍んで笈を冠り。砥石を跨ぐと破ると云ひ元結
を跨ぐと切ると云ふ。有徳理も無き絆を信どわると
虽も新の事とて未だ己の胸に墜らざる。絆をハ魔法
と唱へて避嫌ふ。當國ハ限れり。瓜太郎、己の修業
めもあらんと我慢。我慢を仕扱てわしが餘りの絆

も呆れ返り曩もハ不自由國で未曾有の不便を堪へ
漸く當國も来たと思へ。又復有徳不都合だらけハ
魚て宿病の頭痛を他人の疝氣で患へすと。鬱々神
經を齧さん。人無き場所をぶりくと遊歩く。上策
ある由。うねり醫者とり聴ひたれを。某日一人旅宿を立出
濱辺に到つて東西と徜徉まわらる。一艘の扁舟浪
に漂ひて汀にあり。故高の角も手を掛て脚も舟を
曳寄んとせむ。胸愆つて海に落入る。や否や長を四
五十間程もあつ。大鯨来て何の苦も無く瓜太郎を吞
で海中へ沈し。しを知る者としてハ無り。とぞ

総評

人間纔五十年の中十歳までハ空々寂々残る四
十年の日數僅少一萬四千六百余日を以て永き
浮世の經驗を知り廣き世界の形勢を視ること
書見の外子頼るべきもの無し此文盲國の如く父
母ハ子の教育を誤りあぐら其愆れを知らず
却て他人の正しき道を嗤ひ習慣を醉て方角
を嫌ひ日取を忌とて首途轉居の機會を外すも
其迷つるを悟らざれば却て當然の拳動を怪
し己の心の惑ひとり神籙を信ト占考を憑
て縁組建築を怠り其愚を諫むれを却てこれ
を迷つる者と譏り利を捨て害を取り安まらざる

離れて危きも臨む有然世の便益を用ひず
て神經を無限の憂辛に煩はせも畢竟學をす
して見聞の狭き故あり古來年老て字を習ひ
中年から書を讀でせも能筆學士の名を遺した
る者少からず况や俗談の書翰普通の學問ハ
身業の餘暇に五六年を費やさば成るべし有
然ども不學者の了簡ハ學者の思想と大に相
違して設令己の無筆不學あるが為る不便不
利を知ること有るも身業の餘暇に五六年を費
やさんと心を勵ますこと最も難きことあり任他
己學ぶことを厭みて終身の不便を堪ふるハ自

業自得己の舌由て己の咽喉を突くも異らぬど前
事ハ後事の師と歎俺身捻つて他人の痛さハ知
易く。俺身の不便あることハ他人もあつても亦
不便あり。せめてハ何の事も無き俺子を〜と同
ト不便を蒙らすこと父母の慈悲と云ふべから
む。夫臭い者ハ身の臭氣を知らぬとや。偶像宗
の僧侶。釈迦の方便を知らぬして其詐言を信
ト。基督宗の信徒先づ己が迷つて耶穌の真意を
悟らず。悟らざるが為ハ我を知らぬ。己既ハ横ハ
伏したるを忘れて立てる人を横様ハ想以愆る
より。曲れる物弥々曲りて迷へること益々深し。

学者各國の語も通ぶる由学問の主上日を忘れて
品行の悪き者少あらざるが為ハ却て無学者
の嗤をとるゝことあり。水ハ船を浮べ又船を覆へす。
学ハ身を援け又身を破るゝこと無しと云ふべくら
む。酒ハ酔たる者醒めて己を知り。学ハ酔たる者由
曉て己を知ること有るべし。世人此文盲國の形
勢を觀て嗤けんとせを先づ己の身を省みよ必
ず又可笑しと無しと云ふべくらむ。

瓜太郎物語前編 終

瓜太郎物語前編 一六

